哈　華　著

日本兵

森島黎吉譯

哈　華　著
森島黎吉訳

日本兵

（原名　浅野三郎）

三一書房

一九五一年十一月十日印刷
一九五一年十一月二十日発行

日本兵

定価 二百十円

訳者 森島黎吉

発行者 田畑弘

印刷所 共働社印刷所
京都市上京区下長者町土屋町東

製本所 高橋製本所
京都市上京区下立売通千本西

発行所 三一書房

株式会社 三一書房
京都市左京区北白川西平井町二四
電話 吉田(7)三一〇一番
振替 京都 六四〇三番
東京都千代田区神保町一ノ一四

会員番号 A219008

著者まえがき

この小説は、八年間の抗日戦争中における、日本軍隊の暗黒な内幕と、日本の兵士の覚醒と、「日本人在華反戦同盟」の活動とをえがいたものである。

この小説の中心のテーマは、日本の天皇が中国にたいして宣戦の詔勅を発してからというものは、戦争は中日両国民にたいして、ひどい災難をもたらした、ということである。日本の戦争ずきな軍閥は、八年というながいあいだ、中国の戦場で兵隊をおいつかって、いくさをした。ことに日本軍の背後においては、八路軍や新四軍と、ものすごい、それこそ血みどろの、いりくんだ戦争をした。わが国の人民の死傷、生命財産の潰滅、家屋がやかれて天にもとどく大火事、戦争はわが国のいたるところを血でよごした。われわれの、かたく、つよい民族解放の信念は、むだにならず、ついに勝利した。侵略戦争は、日本人民にも悲惨な結末、流血、死亡、苦痛をもたらした。

とくに日本の兵士は、日本軍国主義の教育のもとで、だまされ、はずかしめられ、損害をうけ、おいつかわれて命をとられた。かれらの家族は、異国の戦場にある夫や子や兄弟が、戦争の魔の手をのがれるように、いのっていたが、かれらは戦死した。ある兵士は、戦争はけっして軍部が宣伝しているような「戦争旅行」でもなければ、あっさりした愉快なことでもない、とさとり、あるものは、おもいきって八路軍や新四軍のなかにある「日本人在華反戦同盟」にはしってゆき、反戦の旗をかかげた。日本が降伏したとき、さいわいに命ながらえていて、送還せられたものには、八年間の戦争は、家族のカイ滅と自己の生命への挑戦であったことが、もっとはっきりわかった。この、おそるべき戦争のかげは、日本人民のなかには、いついつまでものこってゆくことだろう。

八年間の抗日戦争のあいだ、中国共産党と八路軍・新四軍は、国際主義の精神をもって、日本兵士と日本人民にたいした。われわれは、日本の捕虜にたいし、あなどりも損害もあたえず、また戦争中、くるしみをうけた日本兵士にたいして、その覚醒をたすけ、ともに「日本人在華反戦同盟」のがわにたつようにしむけた。あまたの覚醒した兵士は、中日両国の人民の解放事業のために、じぶんのまごころと努力をささげ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かれらのうちのあるものは、戦争中にギセイになったものもある。ここに、死者にたいして、深い哀悼をささげる。

われわれは、戦争中、わが国にきていた日本共産党員にたいし、もっと感謝しなければならない。かれらは、八路軍・新四軍のなかの「日本人在華反戦同盟」にたいし指導し、偉大なる国際主義の精神をもって、おおくの日本兵士の覚醒をうながし、たかく反戦の旗をかかげ、中日両国の解放事業のために、ともどもに奮闘した。

われわれはまた、朝鮮の同志が、同様に国際主義の精神をもって、われわれとともに、八年のひさしきにわたるものすごい抗日戦争をすごし、宣伝工作について、おおくの援助をしてくれたことを感謝する。

この本を書きあげるためには、あるいは日本の友だちが私にくれた、書いた材料により、あるいは「日本人在華反戦同盟」宣伝部の発表、たとえば「反戦同盟はいかに戦っているか?」により、あるいは延安の「解放日報」に報道された日本軍隊のありさまにより、さらに私がたずねた材料を綜合して書きあげたものである。ここで特に感謝したいのは、朝鮮の同志が私のために日本文の材料をほんやくしてくれたことである。

この小説によっても、日本の人民は八年の戦争で十二分に血をながしたので、かれらももう再び血を流そうとおもわない、ということを見ることができよう。中日両国は交戦状態にあるときでも、日本軍閥は、中日両国の人民のがっちりとした、やぶることのできない友情を、けっして打ちこわすことはできなかった。いまや帝国主義が新しい戦争をおこそうとたくらみ、天皇をかしらとする昨日までの戦犯どもを利用して、日本の人民をば新しい戦争のウズまきの中になげこんで、ほろぼそうとたくらんでいるとき、中日両国の人民のかたくむすばれた友情と、世界における平和をまもる力とは、ひとつにとけあって、世界の平和をまもるために奮闘することを、われわれはかたく信じている。

一九五〇年五月二十日

シャンハイにて

哈華（ハテ ホテ）

一

河北平原の起伏した砂丘地帯は、春ともなれば、林の間にうすくつもっていた雪は、だんだんととけてしまう。このあたりの住民がくらしをたてている、幾千万本の桃の木と杏の木は、もはや活気にみちみち、花は枝一面にさきみだれている。花は太陽の下で、あざやかな淡紅色や、ばら色にかがやき、人の肺腑にしみとおるような、よい香をちらしている。花の香は土や林から蒸発した、しめっぽい息とまじりあって、あたりからふきよせてくる。

あさ、蜜蜂はぶんぶんととびまわって、春が万物に生長のよろこびをもってきたことを、ひたすら感じているようである。これまでの砂丘地帯の住民のならわしでは、いまはもう、この林のなかで、桃の木や杏の木の剪定や栽培をはじめているはずであるが、いまではこの林のなかには恐怖と、陰惨と、憂鬱とがみちみちている。日本の鬼どもは「華北確保、華中堅持」、「治安粛正」等等のスローガンのもとに、いまや、河北平原の抗日根拠地にたいし、たえまない「掃蕩」をおこなっている。住民は牛をひき、としより、こどもの手をひいて、ここから四十キロばかり

はなれた村ににげこんだり、林のなかに、かくされている地下洞にかくれたりしている。

日本の鬼どもは、この砂丘地帯になだれこんで「掃蕩」をおこなっている。林にかこまれた村々はやきはらわれ、天にもとどくような大火事をおこし、挑の木と杏の木は一本、一本ときりたおされた。日本軍はこのうつくしい林をこわして、丸坊子の丘陵にかえ、八路軍と遊撃隊がこの林を利用してたたかうのをふせいだ。この林の周囲には、きりたおされた挑の木や杏の木が、たてよこ十文字によこたわっており、花花は日光にてらされて、枯れしなび、色つやをうしなっている。敵の手をのがれることのできなかった人民の、さまざまな死体もよこたわっている。歯をくいしばり、うっすらと目をあけて、かれらの仇をうってくれるのを待ちもうけているようである。……林のなかには、いたるところに血の跡と、はげしいうらみの気持がただよっている。

八路軍と民兵は、この周囲二十キロばかりの林のなかで、敵にたいして反撃をおこなっている。この幾千万本の挑の木や杏の木を保護し、住民に生活のもとでをのこしてやるために、激戦はこれまで、一箇月もつづいていた。

いまは、一しきりの激戦ののちである。三方より包囲攻撃してきた敵は撃退され、のこりの一方の敵は包囲せん滅中である。ただ、単調に「ドン、ドン……」と砲声がなりわたり、ときたま、まばらに銃声がひびいている。

中心地帯の鬱そうたる森林に、小王荘という部落がかくれている。ここには前線司令部があ

る。ごましお頭の、この軍区の参謀長は、この激戦に、もうかたをつけねばならないとかんがえた。かれは宣撫班長王明や、数人の参謀員と一軒の家からでて、戦争している村へいって、戦のあとしまつをしなければならぬとおもった。王明が、とりこにした日本の軍馬を桃の木からとき、馬のはらおびをしめているとき、数人の騎馬伝令が桃の林のうしろから、とび出してきた。かれらは、ひらりと馬からとびおりる。馬は汗びっしょりになって、口からは白いあわをふいている。伝令たちは、息もつかずに、不動の姿勢で、敬礼して、さけぶ。

「報告、旅団政治委員より参謀長への伝達事項。西方の戦闘は終結、敵兵一千人をせん滅、十人以上の日本兵を捕虜にしました。どう処置いたしましょうか」

「伝令、はやく民兵司令部にしらせろ。地下洞にかくれたり、他の村にのがれている人民たちに、われわれは完全に勝利したことを報告せよ、そして帰って来て安心してくらすように。」

参謀長は勝利のよろこびにひたり、微笑をうかべて、一人の伝令にいう。

「はい」

伝令は敬礼し、馬にとびのり、はしりさる。

「同志王明、君ははやくいって、日本捕虜をしまつしたまえ」

参謀長は馬のはらおびをしめている王明にどなった。

「わかりました」

王明は遠くから敬礼をし、すばやく、あぶみに足をかけ、ひらりと馬にのった。かれの心の中も、やっぱり勝利のよろこびにみちみち、ほほえみはひとりでに口もとにあらわれる。

王明は無数の桃の木や杏の木の間を、突っきっていく。道ばたにひろがっている木の枝が、かれの顔にあたらぬように、体を馬の背につっぷして、足で馬のはらをけりながら、とばしていく。眼のくりくりとした、手織もめんの着物をきた小娘が、地下洞の入口の土をはねのけてとびだしてくると、まっすぐに王明の方にとんできて、顔を紅調させながらさけんだ。

「八路軍の同志、わたしたち本当に勝ったの？　鬼たちはみんな、にげてしまったの？」

「本当に勝ったんだ、はやく地下洞の人たちに、みんな家へかえってよろしいとしらせるんだ。」

王明がたづなをひきしめても、はやりたっている馬はなかなかとまらず、はねながら、ぐるぐるまわる。

「まあ、わたしたち本当にかったの？」

小娘はよろこびのあまり手をうちながら、とびまわった。彼女は馬がとまろうとしないのをみて、すぐにおもがいをつかんだ。彼女のよろこびにみちた、まっくろい、つぶらな眼は王明をあおぎみて、わらっている。

「本当だとも、ぼくはいま、日本の捕虜をしまつしにゆくんだ。そこをはなしてくれ、いそぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

んだ」

王明は、勝利をよろこぶ農民の気持にしけきされて、興奮した。

「日本人はわたしたちの村をやいたり、桃の木や杏の木をやいたりしたんだ。あなた、うんとこらしめてください。刀でなぶりごろしにしなければ、このうらみははらせない。わたしたち農民と八路軍のつよさがわかるんだ」

娘は口に手をあてて、わらった。

「よし、よし。手を放せ、ぼくはいそぐんだ」

娘が手をゆるめたので、王明はとんでいった。かれはふりむいて、娘を幾度かふりかえってみた。彼女は手をメガホンにして、大声でさけんでいる。

「わたしたちの軍隊が勝ったんですよ。皆さん、でてきなさい、もぐらなくてもいいんですよ」

としより、こども、女たちは、みんな地下洞からはいだしてきた。一人一人の胸の中はよろこびで一杯であった。としよりたちは、よろこびの舌うちをした。女の子たちは、気狂いのようにおどりはねた。

王明はおもった。『この日本捕虜たちを農民に処置させたら、きりきざんでしまうにちがいない。刀でなぶりごろしにしろとは。百姓たちは、まだわれわれの敵にたいする寛大な政策をしら

ないのかなあ。農民の感情は本当に単純だ。彼女がそうかんがえるのは、敵が残酷にわれわれをころし、家をやき、木をきりたおしたからだ。このうらみは、なんとふかいんだろう』王明ははじめて、この小娘の無邪気さにほゝえみ、しらずしらず、口に笑いがうかんできた。かれは敵の残虐さにまで、かんがえおよんだとき、馬はもはや林の端をぬけ出ていた。やけこわれた家、家具、きりたおされた桃の木、あらわに赤はだかになっている、みるにたえない砂丘、をみた。かれは、百姓がうけた災難をおもい、にがにがしげにくちびるをかみしめた。

「やあ！　王班長。よくきた、わが部隊は三人の日本兵をつかまえたので、君にわたすよ。わが部隊には日本語をしゃべれるものがいない。君は本当によいところへきた。この三人はみんな『頑固分子』ばかりだ。一人は鉄砲をさしあげて降伏を申しでてきたので、ぼくがとんでゆくと、この野郎、うつぶせになって、ぼくに一発くらわせたので、ぼくの帽子はふきとばされてしまった……」

背のひくい、精悍で、冗談ずきな連隊長は王明が部落にはいってゆくと、すぐにそういった。

「ちび大砲、きみは彼らをうちころしたのか」

王明は李連隊長のあだなをいいながら、急に目をまるくして、話のこしをおった。

「この野郎、冗談いっちゃいけないよ。『ちび大砲』だなんて、兵士がきいたら、みっともないぞ」

李連隊長は、わらいながらののしった。このとき、たくさんの兵士は仕事が休みだったので、すぐにききつけて、はゝはゝは、と笑いだした。

「君はかれをうち殺したのかね」

王明は、まじめになってきていた。

「殺したさ、かれが僕を殺そうとするんなら、僕もかれを殺すさ。この阿呆。なにをいってるんだ」

李連隊長は、いわくありげにわらった。

「ほかの二人は」

「劉指導員、君は王君を村につれていって、捕虜をわたしたまえ」

李連隊長はいった。

王明と劉指導員が敵にやきこわされた村へはいっていったとき、道の真中では、たくさんの村民がむらがって、三人の日本捕虜をとりかこみ、いきりたったきもちでわきかえっていた。

「一人は殺したのではなかったのか。どうして、まだ三人の捕虜がいるんだ」

王明がきいた。

「かれは冗談をいったのです。日本兵が一発もうたないうちに、かれはとんでいって、つかまえたのです。二人はとっくみ合いになりましたが、すんでのところで日本人にころされるところ

だったんですよ。そこへ警備員がとんできて、日本人をつかまえたのです」
劉指導員はいった。
王明が群衆をおしわけてはいると、みんなは、がやがやとさけんだり、ののしったりしている。
「こいつを一度なぐらなけりゃいけねえ、わかったか、おまえはおれたち八路軍の捕虜なんだぞ。『掃蕩』しているときとはわけがちがうんだぞ。おまえたち『皇軍』の威光はちっともねえんだぞ」
四人のわかい農民が拳骨をふりあげると、つきすすんでいった。
「なぐっちまえ」
「なぐっちまえ、この野郎をなぐっちまえ」
「……」
人々の群はたえずわめいた。年寄たちはみんな眼をみはり、怒りにもえておしだまっている。その表情は、わかい子供たちが三人の捕虜をなぐることを一致して支持していた。
一人の八路軍の兵士はとんできて、わかものたちをさえぎりながら、いいきかせた。
「この兵隊たちは、さっき捕虜になったばかりだ。われわれはかれらをものにしなければいけない」
「みろ」一人の年とった農民は、はらをたてて、あごひげをぶるるさせながら、こわされた

家と、丸坊主になった砂丘をゆびさしていった。「かれらは、わしらをこんなにまでふみつけよったんじゃ……」

年とった農民は声がつまり、着物のそでをまくって、涙をふいた。

王明は口ではあらわせないいきどおりで、ただ年よりの手をにぎっていた。

「あんたは八路軍でどんな仕事をしてるんですかい」

一人のわかいよめはきいた。

「われわれの宣撫班長です」

劉指導員は、あいそうわらいしていった。

「そうかい、おまえさん。この悪党どものせわをしにきたのかい。ほら、あいつらは、おらたちの家をやいたり、おらたちの桃の木や杏の木をきりたおして、はげ坊主にしてしまった。どうしたらいいんだね。おらたちはこれから、どうして食っていき、雨風をふせぐんだい？　地下洞へ住めとでもゆうのかい？　おらたち、このへんのものは、果物でくらしをたてるんだ、それはおらたちの命のつなだ。着物も日本人にみんな、だいなしにされてしまったんだ……」

わかいよめは、ものすごい勢いで、顔をまっさおにしていった。

「この人たちだけでしたことではないのですよ」

王明は、寛大政策の理論をのべようとおもったが、今のばあい、農民は、はたして、このよう

な寛大な政策をきゝわけることができるだろうか？　とおもった。しばらくして、はじめていった。

「わたくしは、かれらをゆっくり教育しましょう……」

「この野郎たちは、根拠地の人人を殺し、おれたちの家をやいたんだ。捕虜にしたのに、まだいいかげんなことをして、この野郎を教育するのか。おれたちの供出米を、ただでくわしてやるわけにはいかないぞ」

一人の若者は目をぎょろつかせていった。

「八路軍の同志、こいつを村はずれへつれていって殺したらどうです」

若い、二本のおさげ髪の女の民兵が騎兵銃を背負って、はしってきて、王明にいった。

「あなたの民兵隊長は、まだ捕虜を優遇する政策をおしえていませんか？」

王明は、にっこりしてきかえした。わざと彼女に冗談をいい、緊張した空気をやわらげて、このいかりの気分をそらして、うまく捕虜をつれて行こうとおもったのだ。

「おしえました。あなたにおそわるまでもありません。あなたはしらないかもしれませんが、こいつは、ついさきごろ、一人のわかい女の人にたいして……」

女の民兵は、あとをゆうのは具合がわるくて、かおをぽーおっとあかくして、口をおさえてわらっただけで、なんともいわずに、王明をみつめていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.